

国際比較を通じたICD-11に向けた漢方分類の妥当性の研究

研究代表者 渡辺賢治 慶應義塾大学環境情報学部

研究要旨

本研究は日本版漢方分類の妥当性を技術的に検証するとともに、中国版、韓国版との比較を行い、国際分類導入への妥当性を検討することを目的とする。WHO では国際疾病分類(ICD)の改訂作業を行っており、2018年のWHO 総会で改訂版(ICD-11)が承認される予定である。2010年9月にジュネーブで行われたICD改訂運営会議の席で、伝統医学をその中に入れることが決定された。ICD-11に伝統医学を組み入れるためには、WHOはICD全体の整合性を保つために各領域のトピック・アドバイザー・グループを作ったが、その一つが伝統医学のグループである。

現在伝統医学分類(案)が作成され、2013年5月にリリースされたICD-11ベータ版(一般公開)に27章Traditional Medicine Conditionsとして反映されている。作成過程において、日中韓それぞれの国の提案を重んじてきた結果、国際比較が可能かどうか、また西洋医学の病名分類との整合性やコードルールの作成など、課題は多い。

本研究ではこれら課題解決のために、WHOが計画しているICD-11ベータ版のレビューならびにフィールドテストの結果を反映できるように、日本版漢方分類の妥当性を技術的に検証するとともに、中国版、韓国版との比較を行い、ICD-11への導入の妥当性を検討する。平成28年度はレビューが終了し、国際フィールドテストが一部スタートした。これらの過程で、漢方の考え方を反映する定義はほぼ日本側の希望通りに採択された。

また、WHOの改訂会議で、伝統医学の章について紹介をする機会を得て、認知度を広めることができた。

A. 研究目的

WHO主導で行われる国際伝統医学分類のレビュー・フィールドテストに協力し、ICD-11に入る日本版漢方分類の妥当性を検討する。

B. 研究方法

1. 伝統医学分類のブラッシュアップと翻訳

伝統医学分類を含むICD-11ベータ版は各国語版に翻訳し、ウェブ上で閲覧可能な状態とする。

伝統医学分類について、本研究内で日本語訳について行った。

2. 伝統医学分類のレビュー結果の反映

伝統医学分類のレビューはWHO主導で行われた。全世界で142名のレビュワー(日本、中国、韓国、米国、オーストラリア、欧州)

が参加した。スケジュールは平成27年12月～1月にかけて、ウェブ上のレビュー・プラットフォームのパイロット調査が行われ、2月1日～3月15日にかけて、本格的なレビューを行った。4月～5月にかけて、マネージング・エディターがレビュー結果を整理した。

3. 伝統医学分類のフィールドテストの結果の反映

フィールドテストは、スタディ1; 伝統医学分類の有用性についての調査、スタディ2; 伝統医学の章と他の章との比較、スタディ3; 実際のコードをつけて比較する、の3つに分かれている。

スタディ3に関しては、WHOにウェブ上でプラットフォームができ、スタートできる状態にはあるが、日中韓でブラッシュアップして

きた90症例(日中韓それぞれ30症例)がA4一枚のサイズで、診断を問うものになっており、コーディングを問うものになっていないことは以前より指摘されていた。

他の章で現在進行形のような2-3行の簡単なスクリプトでコードをつけるラインコーディングに向けて準備を開始することになった。

4. コーディングガイドの作成

コーディングガイドは昨年度におおよそ完成したが、さらにブラッシュアップを図った。

5. WHO ICTM 会議への参加ならびに情報交換

国際伝統医学分類(ICTM)会議はICD改訂作業の一環として、年に数回行われる予定である。本研究は国際伝統医学分類の国内版作成であるので、ICTM 会議に参加し、情報を得ながら整合性の取れた国内分類を作成する必要がある。平成27年度は11月にソウルで、平成28年度は7月に上海でICTM会議が開催されたが、その会議に参加し、情報交換を行った。

6. WHO-FIC 会議での報告ならびに情報交換

本研究の成果は日本のみならず世界におけるICD全体とも整合性を取る必要がある。平成27年のWHO-FIC(WHO国際分類ファミリー)年次総会は英国マンチェスターで開催され、平成28年は10月に東京で開催された。また、ICDの改訂に関する会議が初めて開催された。その会に出席し、ICDの改訂作業に関する情報収集を行った。

(倫理面への配慮)

分類ならびに用語作成の際には個人情報を持ち込まないため、特に該当しない。

C. 研究結果

1. 伝統医学分類のブラッシュアップと翻訳

伝統医学分類にかんしては英語の他、日本語(資料1)、韓国語、中国語、フランス語、ドイツ語、スペイン語への翻訳が終了している。

日本語訳に関しては、WHO統計分類協力センターと協力しながら行った。

多言語に翻訳されたICD-11伝統医学の章はWHOのウェブ上で閲覧可能である。

2. 伝統医学分類のレビュー結果の反映

レビュワーからの提案をマネージング・エディターが整理したところ、3つのカテゴリーに分類された。リスト1はほぼ同意が得られたもの、もしくはマイナーな意見が出されたもの285項目、リスト2は大きな変更がレビュワーから要求されたもの95項目、リスト3が、分類法や構造に関するもの55項目。これらについては7月に上海でプロジェクト主要メンバーによる対面会議を行い、それを8月にウェブ上に反映させた。

また、大きな問題となったのは、昨年度のソウル会議に引き続き、西洋医学病名と伝統医学疾病の重なりについてであった。前年度は「瘧」をmalaria-like disorder™とすることで、西洋医学と区別することにしたが、それでも紛らわしいということで、原則”like”は用いずに削除する、という方針にした。

さらに病因として伝統医学的説明があっても症候が同じものは削除すべきという方針となった。

日本から提案した漢方分類については、中国・韓国のレビュワーから特殊すぎて、削除すべきという意見もあったが、現行のまま採用となった。

3. 伝統医学分類のフィールドテストの結果の反映

フィールドテストについては、コーディングの評価者間の比較の準備を進めたが、実行されていない。

スタディ1と呼ばれる、伝統医学の章の有

用性について、王立ロンドン病院を中心に行われた。欧州の14の伝統医学の団体から171名が参加した。背景は伝統中医学 89%、日本漢方10%、韓医学1%という内訳であった。

欧州の伝統医学医師は五行説理論に基づいた伝統医学を使用しており、これは現在日中韓で行われている伝統医学とも相当にずれがある。こうした課題が浮き彫りになった。

4. コーディングガイドの作成

コーディングガイドの議論の中ではコードの優先順位を1) 西洋医学病名、2) 伝統医学疾病、3) 伝統医学証とし、この中から最低1つ、最高3つまでコードすることを確認し、細かい文言を修正した。

5. WHO ICTM 会議への参加ならびに情報交換

平成27年11月26・27日にソウルのロッテホテルにてICTM会議が開催された。会議は1日目がステークホルダー会議で、2日目がテクニカル会議であった。

WHOからはウースタン氏、コスタンジュセク氏、エスピノーザ氏が参加して行われたが、この席で、27章の英語版、日本語版、韓国語版、中国語版の冊子が配布された。

Indexについて他の章と一緒にするかどうかという議論を行った結果、WHO-FICマンチェスター会議で議案となったpalpitationTMがpalpitationと一緒にリストされると混乱を招くとの意見が出され、西洋医学的病名と重なる用語について議論がなされ、Indexとしては独立した伝統医学だけのものを作成することで意見が一致した。

コーディングガイドの議論の中ではコードの優先順位を1) 西洋医学病名、2) 伝統医学疾病、3) 伝統医学証とし、この中から最低1つ、最高3つまでコードすることとした。

2日目には伝統医学疾病で西洋医学病名と混乱を来す可能性のある用語について議論となり、palpitationTM、malaria-like

disorderなどの西洋医学病名と混乱を来す用語について再検討が行われた。その結果、たとえ病因論が伝統医学的であっても症候が同じであれば西洋医学のコードを借りてくることで意見が一致した。

日本にとって重要なprinciple patternは単独ではコードしないcluster codeとすることが決定した。この決定は漢方分類に取り、よりよい形でICD-11ベータ版に入るものであり、歓迎されるものと考えられた。

平成28年度のICTM会議は7月25～29日に上海虹橋賓館にて開催された。

WHOからはコスタンジュセク氏、エスピノーザ氏、アーン氏が参加し、日中韓豪の専門家が集い行われた。

会議は月～金までの5日間にわたり行われたが、月～水はレビュー結果を受けて、最終判断を行った。

木曜日はコーディングガイドのブラッシュアップを行い、10月の東京会議に向けた準備について話し合った。

6. WHO-FIC 会議での報告ならびに情報交換

平成27年のWHO-FIC(WHO 国際分類ファミリー)年次総会は英国マンチェスターで開催された。ICD改訂全体が遅れていることから、当初2015年のWHO総会にICD=11が審議される予定であったが、2018年に延期されたことがアナウンスされた。

今後の改訂作業は死因統計と疾病統計を統合したjoint linearization of Mortality and Morbidity Statistics (JLMMS) グループを中心に活動することがアナウンスされ、従来のトピック・アドバイザー・グループ(TAG)は各章の編集委員会機能を担うことがアナウンスされた。

ICTMに関する会議は日中韓からの参加者とWHOのベディルハン・ウースタン氏、ネナード・コスタンジュセク氏、ステファン・エスピノーザ氏が参加して3回開催された。ICTMはICD-11ベータ版の27章に入っているが、文

法的に不完全な部分や統一性に欠ける箇所があり、修正が必要という意見で一致し、各国の作業を分担した。

フィールドテストの方法により、診断のテストをするのか、コーディングのテストをするのかで意見が出され、ICTMソウル会議で検討することとした。

JLMMSで他の章と合体した時に Malaria-like disorder, palpitation™など、西洋医学診断と重なる表現は混乱を来すのではないかという意見が出され、ソウル会議で検討することとした。

平成28年度のWHO-FIC年次総会は10月8日～12日に東京で開催された。それに引き続き12日～14日はICD改訂会議が行われた。

WHO-FIC会議は毎年のものであるが、ICD改訂を幅広く認知してもらうために、今回は国連加盟国に参加を促し、幅広くICD改訂についての認知を図った。

伝統医学に関しては改訂会議の中で、10月12日（水）午後に伝統医学のサイドセッションが行われた。また、10月14日（金）のプレナリー・セッションで午前伝統医学のセッションが設けられたのと、午後に水曜日の伝統医学のサイドセッションに関する報告の機会を頂戴し、渡辺が報告した。

伝統医学に関してはサイドセッションのオープニングリマークをマーガレット・チャン氏が行っていただいた他、12日（水）午前のオープニング・セレモニーでもマーガレット・チャン氏からICD-11に伝統医学が入ることは歴史的なことである、というスピーチがあった。

一方、2010年から活動してきた伝統医学トピック・アドバイザー・グループ（TAG）はすべてのTAGが今後解散することに伴い、今回の改訂会議を以て解散となった。今後の活動がWHOの中でどのように位置づけられるかについては明確になっていないことが不安材料である。

E. 結論

伝統医学の章について国際レビューが行われ、中韓と異なる体系を持つ日本提案に対して、厳しい意見も出たが、おおよそ日本の希望通りの最終版が完成した。

フィールドテストについてはスタディ1は国際的には進捗したが、スタディ3については準備を進めたのみで、実際には始まらなかった。

東京で開催されたWHOのICD改訂会議で、伝統医学分類についてアピールする機会を得て、認知度が向上した。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

論文発表

① なし

学会等報告

① なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

